

健康文化

音の世界

若栗 尚

先日、今まで住んでいた家を建て直すことになって仮住まいの身になった。今までのところを売って別のところに建てれば引越しも一度で済み負担も少なくなるが、20年も住んでいると愛着があって、子供たちの“やはりここがいい”というのを容れて仮住まいが始まった。

500m位離れたところにあるアパート（独身者を対象にした2階建て4部屋位の小さなもの）を借りた。

戸建て住宅地の中にあり、大家とは接して建っている。道路も車のすれ違いがやっとの程度の細いもので、アパートは、道路からひとかわ離れている。

以前のところは、数mの用水を挟んで2車線ではあるが比較的広い道路があり、その向こう側は3階建ての集合分譲住宅の群があった。また、その周囲に、集会所、緑地、テニスコート、バレーコートなどがあり、今のところと比べると、聞こえる音も種類が多かった。

仮住まいに移って最初に感じたのは、建物の遮音がよくないことであった。周囲の環境は住宅地であり、それほど目立った騒音はない。交通量も少なく、交通騒音は気にならない。

しかし、生活騒音の類は、絶対量は少ないが、内容がはっきりして、以前のところよりよく聞こえるように感じられる。隣接する大家の水洗の音や前面の家の子供の声などが主なものでレベルの高い音は少ない。

ヘリコプター、小型機の音は以前のところより飛行コースの直下に近くなったことや、居間の大きさが小さくなったので自分の家のテレビなどの聴取音の

レベルが小さくなっていることなどでよく聞こえる様になった。

また、以前のところより距離が増えたはずの小田急線の車両の走行音や踏切の警鐘の音がよく聞こえている。

距離にして数100mでこれほど受ける感じが違うとは知らなかった。

小鳥の声は以前のところの方が種類も多かったし、大きかったように思う。もし、小鳥にとって声によるコミュニケーションが重要なものであるのなら、暗騒音、背景騒音の多いところでは声が大きくなっていたとしても不思議はないのかもしれない。

人間の場合は、確かにこの傾向がある。

子供の頃、親戚の織り屋のところに遊びに行つて気がついたことだが、織機のレベルの高いインパルス的な音の中で会話をしている織女さんたちは、大きな声で話すことが習慣になっていて、静かな環境での会話でも、他の人たちに比べてレベルが高かった。

ひとつには、レベルの高い騒音の下での作業で、やや難聴の傾向があったのかもしれないが……。

賑やかな表通りの小鳥屋の小鳥の声と静かな家庭の小鳥の声とでは差があるのだろうか。興味がある。

話は変わるが、環境庁がサウンドスケープの考え方を導入した音環境保全対策を考えたいとして平成7年に日本の音風景検討会を、前に健康文化の文章の中で名前を挙げたことのある小林理学研究所の山下充康氏をはじめとする9人の委員を選んで開き、この委員会が残したい“日本の音風景100選”を選んだ。

狙いは、「日常生活の中で耳を澄ませば聞こえてくる様々な音についての再発見を促す」とことと「良好な音環境を保全するための地域に根ざした取り組みを支援する」とこととされていた。

全国の自治体、諸団体、個人からこの作業のための公募に対して、3ヶ月の間に738件もの応募があった。これからみても各方面の関心度には大きなものがあつたといえる。応募されたものは、どこの何の音という形である。

では、実際に応募され、選定された音はどんな種類のものだろうか。

応募された音風景については様々であるが、その対象となる音源からみると生き物の音声、生物以外の自然現象の音、生活文化にまつわる音、これらの複合の音、その他に分けられる。

生き物の音声としては鳥、昆虫、蛙などの市街地やその周辺でよく聞かれるものが中心になっている。山中や海で聞かれるものもとり上げられている。

その内訳は鳥の声12（応募93）、昆虫の声7（応募40）、蛙の声2（応募23）、その他の動物2（応募13）、植物5（応募29）、これらの複合したもの3（応募10）である。

植物というと音声があるかということになるが、風の当たる音があり、葉の擦れ合う音、枝の当たる音がある。これらも環境音としては意味がある。

ここにはこの分野の音として私たちが思い浮かべる種類の音は殆ど含まれていないように感じる。同種の音は毎日聞き慣れたものである。しかし、地域性をいれて考えることにはまた別の要素が入ってくる。

生物以外の自然現象の音としては、川、滝、用水などの陸水の音10（応募93）、波などの海の音9（応募41）、その他の自然現象0（応募21）、これらの複合したもの0（応募9）があげられている。

これらの音は、皆、どこにでもある似た音として私たちの頭の中にあるが、それでもそこでなければという際だった特色のある音があるし、関わりのある地域の人たちにとっては、それぞれに想い入れのあるものである。

生活文化にまつわる音として、祭りや盆踊りなどの行事の音9（応募69）、寺、教会、時計台の鐘などの信号的な音10（応募65）、織物の機音や、SLの音、船舶の汽笛の音、紙すきの音、陶器制作の音などの産業・交通の音11（応募74）、風鈴や水琴窟、川遊びの音、鶺鴒、時刻を告げる太鼓の音などのその他の生活文化の音6（応募73）並びにこれらの複合した音1（応募10）がある。

これらの音は、私たちの生活に結びついた音として記憶されていて、音の名前を聞いただけでも、その音が頭の中に響いてくるが、正確には、その時、ひとりひとりの思い浮かべる音は、皆、違っていて、それにつながる個人個人の思い出の情景とともに浮かんでくるものである。

こういうとき、最初に思い浮かぶのは不思議に、遠い子供の頃または、若いころの情景であって、その後最近の記憶につながる情景に変わる様を感じる。

また、以上あげたこれらの音の複合の音12（応募52）、その他の静寂さとか分類できない音として不動山の巨石に耳を当てて聞かれる紀ノ川の音といわれる川のような音（「あの世の音、この世の音」とも呼ばれている音）1（応募23）を加えて100の音が採り上げられた。

これらは、同種の音は身近にあるが、選ばれた音そのものは音環境保全対策という点から地域的なことを考慮に入れた特定のものであり、この他にも地域性の少ない全国共通に近い感覚で捕らえられる音で本来ならこの中にはいるべきものも数多くある。

たとえば、前にも書いたフクロウの声やウグイスの鳴き声などはこういう地域対策としての特徴はないにしても、自然を大切に保護してゆかなければという感覚的な面への働きかけでは大きなものがあると考えられる。

物売りの声や方言なども、今のうちに保存しないと大変なことになると思うし、民謡などもやはり早く保存を考えるべきものであろう。

こういう懐かしい音を大切にすることは、環境を守ってゆく上でも必要なことであるし、人間らしいゆとりを保つためにも、また、後の世代の人たちに伝えるためにも大切なことであろう。

もう少しいろいろな面から考えてその保護、保存に積極的に取り組んでゆく必要があるのではなかろうか。

（（財）空港環境整備協会 航空環境研究センター）